九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

江戸紀行と木曾路

板坂, 耀子

https://doi.org/10.15017/4742072

出版情報：雅俗. 17, pp.105-118, 2018-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

◉研究ノート

江戸紀行と木曾路

板坂　耀子

1.「木曾路」の呼称

江戸時代の紀行の分類は、地域や時代で整然と分類するより、作者層や街道その他の特色で、ゆるやかに仕分けしながら行う方が全体像を把握しやすいと考え、「蝦夷」「女流」「参詣」などと見た目はあまり統一感のない項目で研究を進めてきた(1)。

その項目のひとつに「木曾路」がある。中山道とも呼ばれる五街道の一つで東海道に次いで往来が多く、紀行の数も『国書総目録』の書名等から確認できるものだけで八〇点近く存し、「東海道」紀行の諸作品より、作品としてすぐれたものが多い。

まだ読んでいない作品も多く、全体像の完璧な把握にはほど遠い現状だが、現時点での調査報告としてまとめておきたい。

「中山道」の呼称は江戸時代にも使われるが、紀行のタイトルや本文中では圧倒的に「木曾路」の使用が多いため、ここでも「木曾路」の称を用いる。時に「東山道」の語を使用するものもあり、これは、以下のように、江戸時代ではこれを中山道と同一とみなすことが多かったからだろう(2)。

> 此道すぢは『続日本紀』に『大宝三年三野国岐蘇路をひらく』とあれど、これよりはるかさきに日本武尊碓日たうげより『あがつまはや』と橘姫を慕はせたまひ科濃にいたり給ふとなん。又『古事記』には『あしがらを過て甲斐より科野におもむきませし』としるせり。いづれにもはるけきときよりありしと見えたり。『三代実録』には詔をうけて左馬権少允従六位上藤原正範朝臣みめぐり給ひて、木曾は三野国と定られしかども、（秋里籬島『木曾路名所図会』文化二・一八〇五年刊　文化元年自序）
>
> 岐岨路名所図会は所謂東山道なり。今俗に中山道ともいふ。京師より起りて江戸に到る、都て近江美濃上野武蔵等五箇国の道筋なり。これを吉蘇街道といふ。六十九駅道法百三拾五里余なり。（同上、凡例）
>
> 中山道　和漢三才図会赤坂駅條に此処に木曾と中山道との追分有り。木曾路又信濃路と称す。是東山道中之一別名也。木曾は谷の名也。信濃は国の名也。馬籠峠より熱川駅に至る凡二十一里、木曾谷と称す。安曇郡に属す。（静嘉堂文庫『中山道記』原漢文）

なお『木曾路名所図会』は、後述する貝原益軒『木曾路記』とともに、江戸時代の木曾路関係の書籍では最も多くの板本が現存しており、広く読まれた。当時の名所図会は、一人称の作者が登場する場合もあり、厳密には紀行との区別は困難である(3)。

2．江戸時代の木曾路紀行

以下に、管見の木曾路紀行三四点について、内容を簡単に紹介する。長期間にわたって調査したため、カードの不備などにより、記述が不統一なのを了承されたい。

① 老の木曾越　写本一冊　細川幽斎（慶長一五・一六六二没）　東北大学狩野文庫

この紀行自体は活字にもなっていて珍しくないが、この写本には末尾に大田南畝の書き込みがある。ただし、『大田南畝全集』に収録される雑誌「上方」に掲載の写真には印があるため、この狩野文庫本は自筆ではない。

② 木曾路紀行　沢庵　慶安四（一六五一）奥書　『沢庵和尚全集』

和歌が主で、記述は簡略である。諏訪湖と寝覚ノ床の描写のみがやや長い。

③ 東山道日記　山鹿素行　承応三（一六五四）『山鹿素行全集』

三帰から松枝まで。前後は欠。片仮名と漢字で、簡明に記す。地名で項目を立てている。

④ 備前様仲仙道の日記　写本一冊　宝永二（一七〇五）　大阪府石崎文庫三七七－六

将軍家の養君が定まってめでたい春ということを最初に述べる。春の賀の勅使が京都から来て行事がすんだ後、自分も帰郷の許しが出て伊勢の久居に帰る。その際、東海道は慣れているからと木曾路を通る。記述はやや簡単だが、素直な和文で、旅の様子がよくわかる。また他書にない珍しい記事が多く、時代の早さとともに注目すべき紀行である。

⑤ 岐蘇路之記　貝原益軒　板本一冊　正徳三（一七一三）刊（後述）

⑥ 木曾の山ふみ　連阿　写本一冊　享保十三（一七二八）　宮内庁書陵部

あくまで私的な記述で、ばらつきはあるが、詳しい部分は面白い。旅の様子もよくわかる。一条兼良の『藤川記』をよく引く。

⑦ 木曾の麻衣　不角　写本七冊　享保十五（一七三〇）刊本の写　東京大学洒竹文庫

詳しいが俳文調で軽妙、面白く読める。「残念松」の話、牛若丸の伝説、小町の像に石を投げる女たちのこと、手習いに行く子どものこと、駕籠の中の夢、妻籠の恋物語など、興味ある記事が満載である(4)。

⑧ 岐蘇路寝覚草　福王信近　写本一冊（横本）　延享三（一八四七）

天理大学古義堂文庫

冒頭に、益軒を引き、それにもれたところを記すと言う内容の「丙寅春弥生」（延享三年）の自序がある。村の名など詳しい。道中記風の備忘録。ただし字はていねいである。

⑨　木曾路之記　竹田昌忠　写本一冊　寛延四（一七五一）　金沢市立図書館加越能文庫

主君に従い、江戸に行った際の紀行。北陸道を行ったのは二十七度に及ぶが、今年は越後の海道が荒れていたため木曾路を通ったとある。北陸から関ヶ原に出て木曾路に入る。記述は簡単で無駄がなく正確で、記録文体だが和歌も入る。末尾に道程記、見聞記を附す。旅の実態もよくわかる。坂本から先の江戸往復は記しておらず、復路には歌が多い。その後に名所和歌をあげる。明確な筆致で見聞を具体的に記し、自己の感情にはほとんど触れない。

⑩　岐蘇路安見絵図　棄楊　板本一冊（横本）　宝暦六（一七五六）　板坂所蔵

寛政十一年の再版。序文に益軒「木曾路記」と須原屋茂兵衛「木曾懐宝鑑」の両書を利用した旨を記す。全丁に図会で街道の宿駅や名所を簡単に記し、益軒の文章を引用している。

⑪　岐曾路日記　村尾清子　写本一冊　宝暦八（一七五八）　東京大学E二六－一〇六九

流麗な文章で旅の様子を細かく記す佳品。雨にたたられて景色をあまり見られていないのが惜しいが、自己の考えもよく述べており興味深い。

⑫　岐岨路の記　高田信辰　写本二冊　宝暦十一（一七六一）序　静嘉堂文庫

宝暦一〇年、将軍宣下の祝詞を述べるための京都の町人一行に加わって江戸に赴く。俳諧が中心で絵が多い。その絵が珍しく細かく非常に面白い。

⑬　木曾紀行　巨山　写本一冊　天明三（一七八三）　関西大学

「事に役せられて」しばしとどまっていた美濃の笠松から、天明三年江戸に帰る折りの作品。冒頭に木曾路の紀源等について説明。また人夫や茶店の翁などに話を聞いたことを記す。後半は甲斐に行く。記事は簡単だが珍しいものが多い。狂歌をまじえる。烏丸亞相卿の紀行を見ているか。

⑭　中山道筋道之記　作者不明　写本一冊　寛政元（一七八九）奥書　鶴舞図書館

覚書風の箇条書き。寺の名など詳しく正確。面白い記事はあまりないが、根津甚平の墓や一呑清水、和泉式部の墓などを紹介する。

⑮　木曾路道中記　坂田諸幸　写本一冊　享和年間（一八〇一～一八〇三）　東京大学（自筆）

「世に在り布ける道中記の類」で珍しいものではないが、伯父の書いたものなので珍しくここにとじておく旨の「篁蔭誌」の序あり。内容

はかなり詳しく貴重な記事も多い。小峯弘国の記事と同一のもの多く、何か関係があるか。

⑯　壬戌紀行　大田南畝　享和二（一八〇二）『大田南畝全集』

東海道を描いた『改元紀行』と対をなす、雅俗がよく溶け合った名作。

⑰　きそのみちの記　作者不明　写本二冊　文化三（一八〇六）　九州大学

共表紙仮綴の二冊で、それぞれ中央に打附書で「きそのみちの記」「木曾道のおぼえ書」と外題がある。鳥取の「因幡のみたち」を出発して中国地方から京都を経由して、木曾路を通過して江戸に着く。二冊は奥書がなく、別人の作者のようだが、旅の行程と見聞は同一で文字も似ており、しばしば同一の文章もある。『きそのみちの記』が単調で平凡なのに比して『木曾道のおぼえ書』の方は記述が巧みで、木曾の懸橋、浅間山の噴火の際の焼け石など記事も豊富で面白く、添削した清書本とも考えにくい。二人の作者が紀行を共作することは時にあるが、このような関係はあまり例を見ない。

⑱　たく柴日記　岡田啓　写本一冊　文化五（一八〇八）　岩瀬文庫（自筆）

木曾を経て武州に至る。冒頭に阿仏尼や更級日記のことを書く。具体的で詳しいが冗長ではない。名作の一つである。

⑲　讃州丸亀ヨリ東都まで中山道下り道の記　作者年代不明（文政以降）（一八一八～）　写本二冊　東北大狩野文庫

非常に詳しく、後書きや前書きも長い。ただし全体の中で木曾路の部分は少ない。中津川では覚明の墓、妻籠では山々の描写、須原では便所で使用する木のことなど面白い記事や、生活描写が多い。図も少しある。和合酒や魚のうまい宿があるかと思えば、魚がなく、便所に紙がない宿もあるなど、宿泊施設に落差が激しいことがわかる。

⑳　木曾路の記　作者不明　写本一冊（横本）　弘化四（一八四七）　金沢市加越能文庫特一六九三―一九

道中記風ながら記事はかなり詳しい。大地震で信州路が使えず、中山道から美濃路へ向かう。寝覚の床と懸橋は長文で説明。塩尻では「御渡り」にも触れる。古跡や産物もよく記している。

㉑　岐蘇紀行　金谷武英　写本一冊　嘉永元（一八四八）　金沢市加越能文庫

漢文。末尾に詩を集める。描写は詳しく、独特の記事もある。義仲に同情的。芭蕉の木曾の懸橋の句を引用する。

㉒　木曾の行かひ　倉地言行　写本一冊　嘉永二（一八四九）　慶応大学

一条家の姫君秀子（寿明）が徳川家に輿入れのため、江戸に下るのを京に迎えに行く際の紀行。字が非常に読みにくい。公の旅なので、各駅で多くの家士らに迎えられ歓待をうける。京では一条家をしばしば訪問する。帰途の記事はいたって簡単。岩石や渓流の雄大な風景に

感銘を受けている。中途の宿のにぎわいもわかる。

㉓　中山道木曾路道の記　小峯弘国　写本一冊　嘉永二（一八四九）
東京大学
記事は詳しく、道中記風で、実用的記事が多い。名所に関する記事を末尾にまとめる。

㉔　岐岨の道草　磯部最信　写本一冊　安政末（一八六〇）奥書　慶応大学
記述は簡単だが、旅の実態がよくわかる雅文である。面白い記事が多い。安政末年、合翠庵の主人の奥書あり。

㉕　峡中紀遊　菊池駿　板本一冊　文久元（一八六一）刊　『甲斐叢書』七
漢文。「遊御嶽記」「遊羅漢寺山記」等を含む。木曾路に関する記事はない。

以下は制作年代が不明である。

㉖　烏丸亞相卿木曾路紀行　写本一冊　東京大学E二六－四三六
短編だが面白い。文章が詳しく描写が的確。名作である。⑬の巨山『木曾紀行』（天明三）が参照している可能性があり、それ以前の作か。

㉗　木曾路紀行　鶴眠堂　写本一冊　国会図書館八三一－五四（稿本）
名所図会の体裁。『木曾路名所図会』の写しか。

㉘　中山道木曾旅鏡　作者不明　写本一冊　徳島県立図書館
末尾に距離等の表がある。それ以外は⑮の坂田諸幸と同一か。

㉙　木曾路御休泊記　作者不明　写本二冊（横本）　東北大学狩野文庫
道中記風の備忘録で、記事は簡単だが正確で見るべきものがある。距離などは細かく正確である。長い記述は益軒によるものが多い。他にも同一内容の本があるか。

㉚　木曾海道記　作者不明　写本一冊（横本）　宮内庁書陵部
道中記風の備忘録。最初は柏原、番場、醒ヶ井など美濃から始まる。実用を意識してか、距離や位置に関する正確で現実的な記事が多い。

㉛　仲仙道道中記　作者不明　板本一冊（横本）　天理大学古義堂文庫
「美濃大井　ききやう屋」の刊記。冒頭に絵一丁。あとは地名と距離と馬代。非常に簡単な備忘録の道中記。末尾に善光寺道、伊勢道の距離表。刊記は「美濃大井　桔梗屋」。

㉜　中山道記　作者不明　二巻二冊　静嘉堂文庫
漢文で、ところどころ和文がまじる。字は小さく記事は非常に細かい。木曾路以外の記事も多く、尾張国関係の記事がかなりある。

㉝　岐蘇西還記　角田簡　写本一冊　静嘉堂文庫
漢文。記事は詳しく描写も丁寧である。

㉞　中山道の記　作者不明　写本一冊　九州大学
冒頭に紀貫之にならって書いたこと、この書き方が最もよいことを記している。和歌が多く、雅文臭が強い。記事は概ね簡略である。

『国書総目録』には、この他四二点（目録等の書名のみで現存が確認できない十点を含む）の書名（作者名がないものは作者不明）がある。

甲州海道紀行　写本一冊　栗田文庫（享保一二）
連阿法師木曾路紀行　写本一冊　福井久蔵（享保一三）
東山海紀行　梅水堂正路　写本一冊　無窮会図書館神習文庫（寛保二）・祐徳稲荷
錦村君岐蘇路日記　金子孫二郎　一軸　安永頃　慶応大学（自筆）
木曾東海道中記　一冊　天明年間刊　お茶の水図書館成簣堂文庫
木曾路道中記　三河屋定蔵　一冊　寛政一一刊行　逓信博物館
追蘇遊録　佐藤担　写本一冊　享和二　国会図書館
甲州かいだう道中記　一冊　文化四刊　宮内庁書陵部
吉蘇日記　和安　写本一冊　文政五　無窮会図書館織田文庫
木曾路の記　藤原直栄　写本一冊　東京教育大学（文政一二写、住吉の記・奈良の記・東路の記を付す）
甲州道中記　板本一冊　天保七成　無窮会図書館神習文庫・旧浅野文庫
甲州道中記　水野猶忠　写本一冊　安永九写　東京博物館
甲州道中記　霞沢庵翠風　写本五冊　甲斐叢書三
下岐蘇川記　斎藤拙堂　天保八　増補紀行文集
中山道木曾路道中記　渡辺武俊　写本一冊　天保一一　長崎
木曾路道中記　粟津大進　写本一冊　天保一三　大谷
峡中半年行　写本一冊　旧三井（嘉永五写）
慶通筆記　藤原慶通　写本一冊　嘉永二　無窮会図書館神習文庫
※木曽道中
中山道帰路日記　写本一冊　文久元　萩毛利家
峡中紀遊草　川村衡山　一冊　万延元序刊　『甲斐叢書』
東山道紀行　那波道円　『詞林意行集』四の内
中山道道中記　板本一冊　江戸川乱歩
甲信相紀行　写本一冊（やよい日記・相模紀行と合一冊）　大橋図書館
木曾路之記　写本（玉晁叢書俳叢の内）　早稲田大学
おもひやりの日記　古軒　写本一冊　無窮会図書館　※自江戸経木曽路至京
木曾路の御路の記　写本一冊　蓬左文庫
岐蘇路日記・江戸邸日記　朝岡柳昌　写本一冊　栗田
木曾路日記　写本一冊　江戸末期　大東急（稿本）
木曾路　写本一冊　岡山大学池田文庫
木曾路之記　写本一冊　岡山大学池田文庫
諏訪見聞記　写本一冊　東大史料編纂所
木曾陸　写本三冊　大橋図書館

峡中勝覧　写本一冊　無窮会図書館
懐玉道中鑑　板本一冊　岩瀬文庫　※東海・木曽関係

以下は目録等での書名のみで現存が確認できない。

木曾記　一冊　元和年間　（高木家地誌目録）
岐岨紀行　松崎観瀾　二冊　（近世漢学者著述大成）
信峡紀行　恩田蕙楼　三巻　（近世漢学者著述大成）
木曾紀行　恩田蕙楼　一冊　（近世漢学者著述大成）
木曾紀行　佐藤牧山　（近世漢学者著述大成）
岐岨紀行　神竜　（越佐名家著述目録）
中山道記　一冊　（高木家地誌目録）
木曾の道芝　蓮真　一冊　寛政四奥書　（旧蓬左文庫目録）
江戸岐岨行程記　中村清右衛門　一冊　（旧三井）
木曾路之記　加藤宇万伎　（大阪名家著述目録・国学者伝記集成）

3. 木曾路紀行の構成要素

(1) 街道の特徴

江戸時代、木曾路はどのような街道であったか。貝原益軒はこう記す。

岐岨路は、かねてきゝしよりも、道けはしからず。かけはしなどあれど、さほどあやうからず。大井川、阿部川などのごとき、洪水にてこえがたき所のうれひなく、又桑名、新江などのごとくなる、渡海のなやみなし。うすひたうげより馬籠まで、信濃の内四十七里は山中なるゆゑ、坂多けれど、箱根のごとくさかしき所なし。山中なるげにや、人の心すなほにしてひすからず。あるじのもてなし、他方にくらぶればまめやかにいとあつく、やどりも、器も、けがらはしからず。山川のかたち、林木のこだち、諸州にすぐれうるはしくて、日々に目をよろこばしむ。行人すくなくして、往来まれなれば、道の中、いそがはしからず、心しづかなり。又人馬のちからつよき故、竹輿の内、馬鞍の上おだやかにして、あやうからず。只十一二月、正二月は雪ふかくして行がたし。われ江戸に行こと十二度、皆東海道をゆきかへりしに、のちのかへるさに、老の身はたび衣又きぬべきたのみなくて、はじめて此道をとほり侍べりしに、おもひかけずよき道としりぬ。其時日々に見聞せし所を、いさゝか後の思ひでにせんとて、道ゆきぶりに人のたづねて、書しるし侍べる。我一人の見聞はたのみがたければ、もれたる事、たがひたる事おほからんはうらめし。後のみむ人、彼道のことをしれらば、そのおちたるをおぎなひ、たがへるをたすけ給へ。（「木曾路記の後叙」、宝永六年人日　貝原篤信書）

簡にして要を得た、すぐれた木曾路の紹介である。他に、次のような記述もある。

すなはち左の方中山道のかたに入るに、にはかにひなびたるさまして、東海道の賑ひには似もつかず、（『壬戌紀行』　享和二）

今は治れる　御代にあひて道もゆたけく、かけはしもたゆたふべきけしきもなく、出水の時ゆくりなくとゞまるわざはひもなく海をわたるうれへもなし。山賤のみおほくして人のこゝろすなほに剛毅木訥の仁にかよひ、人馬のちからつよく山川のかたち、艸木のこだち、外国にすぐれてうるはしく日々に目を洗はしむ。行人さすがにすくなくして、道の程ゆたけく官道七ツの上にたてり。（『木曾路名所図会』自序　文化元）

足を踏み入れた時から、東海道とは異なる雰囲気の世界が広がる様子が、これらの記述からは浮かび上がる。

（2）主要な題材

木曾路紀行を構成する要素には、概ね以下のようなものがある。

〔風景〕

多くの作者たちは、圧倒された風景の威容について述べている。特に「寝覚ノ床」はよく取り上げられる(5)。

二里あまりのぼりて峠にいたる。なかばのぼるほどより雲おほひて、たゞいまゆく道のほとりは、さき立人も見えず。風はげしくなりて、やゝはるゝけしきなるに、峠はことに風のはげしければ、えやすらはで、いそぎくだるほど、風にはらはれて雲のこめたる山のみね〳〵、草木なども見えゆくが、うすき墨絵を見るこゝちす。（『烏丸亞相卿木曾路紀行』）

臨川寺より見おろすところ、すなはち寝覚の床なりき。かの浦しまが子の釣をたれしといひ伝えける岩ほ今にあり。まないた岩、かま岩、ゑぼし岩、獅子岩、象岩、地蔵岩、屏風岩などゝ名づけ置たる、多し。木曽川の流はすべて岩ぐみたかき、川水はその色、あいのごとくにて川浪はいとしろく岩にむせびて流れゆく、そのいきほひ、たとふるにものなし。野尻辺りより三富野へゆく道辺なる坂路より見くだしたるも、処々風景すぐれたれど、中にも此所ほどことなるはなかりし。峰たかくつゞきたる山々にさま〴〵の樹木どもしげりあひて、水のきわまでも、いとしげく生ひ茂り、巌石どももいくらともなくたゝみあげたるやうにて、たかくそびえたり。此所にては木曽の大川もいとほそ

架蔵・木曾路安見絵図より「寝覚の床」

著作権保護のため図は非表示

く川はゞのさほみて、岩ほのはざまをながるゝ、そのいきほひ誠にいはんかたなかりし。彼釣たれし岩とて広くたいらかなる大ひなる岩のかたはらに木艸しげりて水ひろく流れゆくところには、殊に大ひなる岩どもさまぐ〳〵につらなり、すべて此所の景色、筆にもおよびがたく言葉にものべがたし。（竹田昌忠『木曾路記』）

〈風俗〉

都会では見ることの少ない動植物や建築物、器物にも、多くの紀行が注目する。

熱川　（略）所々に茶屋有り。毛もの多し。熊の皮鹿の類沢山なり。もゝ熊といふ毛物有り。ふくろ鳥の形にして羽根長く羽根先に手あり。むぐろもちの手の如し。（金沢市立図書館『木曾路の記』）

木曽谷はすべて家居軒低く家根は桑の永き板を並べ竹もて押へ石を並べし家根也。（倉地言行『木曾の行かひ』）

東海道と異なり、現地の人々の生活の場が身近に見えるのも魅力の一つとなっている。

福嶋に至る。こゝは山中より出てうりかふ便よき所にや、つねに市のごとく賑へり。家数も立ならびたれば、ひなの都ともいふべし。（連阿『木曾の山ふみ』）

此所駒多し。望月の牧は名所也。此宿に鹿毛の馬をおかず。他所より来るをも一宿もさせず。月（ママ。望月か）の神のきらい給ふと云り。（東北大学狩野文庫『木曽路御休泊記』）

奈良井のすくにやどる。こゝらあたりは獣類の皮、或は折敷、堅物、其余の器物を商ふ。（倉地言行『木曽の行かひ』）

木曾路のみが題材ではないので、ここでは取り上げなかったが、徳永信之の奇談集『朽鞋雑話』（享和二年　写本一冊　宮内庁書陵部）にも、木曾路の馬子の純朴さについての具体的で詳細な記事がある。作者が桶川の駅で馬子に勧められて百七十銭で乗ることにしたが、その後同じ距離を他の客が別の馬子に二百五十銭で話をまとめた。しかし馬子は「心遣ひなく召せよかし。さきに御約束申せし上は、今更よき賃銭有とて、変改いたすは道に非ず」と、いやな顔一つしなかった。途中で休憩する時も丁寧に断り、馬もいたわり、会話の中で今の主人に九年仕え、献身的に奉公していることがわかって「噺の内に、をのづから忠孝信義に叶ひたる志あり」と、作者は深く感銘を受けている。

〈故事〉

江戸時代の紀行作者の多くはどのような美景でも、由緒や来歴があって歴史の中に位置づけられないと、欠けたものがあると感じている。木曾路は木曾義仲関連のものをはじめ、軍記物の舞台でもあって、この種の題材に不足することはなかった。

星うつり霜かはりて、みちすぢも改り、中むかしよりこのかた、「みすゞかるしなぬの木曽」と詠せたまふ、今はいにしへの道もかはりて薗原山、伏屋の里なども行来にはあらず、さらしな姨捨山も道より遠く梯はしも今はあやうき事あらず、高貴もゆき〳〵給ふぞかし。小野の滝のおのづから落て寝覚の床のむかしに変らず、三帰の里は名のみ、桔梗が原おほく田畑となり、諏方の湖水の橋は千早振神のわたりそめ、ころもが御崎より富士の影はるかにうつり諏方の神まつり、御射山の保屋のすゝきの秋風にそよさぞ鹿のつま乞ふ声、御嶽のやしろ駒がたけ和田たうげのさかしき、筑摩川のながれしきりなる、軽井沢のむまやはけぶり絶せぬ浅間山のふもと、碓日の阪はやまどりの尾のなが〳〵しく、妙義山はいとたうとく、からす川に佐野の舟橋のあとあり。岡部の里、熊谷の寺、氷川のやしろの杜深く戸田川をわたりて江戸にいたる。此道むかしはあやうき所おほくして道ゆく人もまれなりしとぞ。西行上人などはかよひ給ひしにや。其名残の残れるもあり。義仲あその城、巴が家のあとあはれなり。（『木曾路名所図会』自序）

宮ノ越　（略）此御神は昔義仲朝臣の城中に勧請在りし御宮なりといふ。此森の奥に草の家の一軒有けるにぞ、こゝにわけ入りておとなひしに主とおぼしきが内より出けるを見るに、年の頃六十の上五ツ六ツも過たると見ゆ老人の立でぬ。かの義仲公の御社の道をとひしに念比にをしへける。（東北大学狩野文庫『讃州丸亀ヨリ東都まで中山道下り道の記』）

また、木曾の懸橋の記事にともなって、江戸紀行ではあまり登場しない松尾芭蕉にふれることが多いのも、木曾路紀行の特色だろう。

4．貝原益軒『木曽路記』の意義

（1）紀行類への影響

木曾路紀行が紀行文学史の上で重要なのは、貝原益軒の『木曾路記』を生み出したことである(6)。

その成立の過程を簡略に述べる。『東路記』（貝原家蔵の稿本）から、「木曾路記」「日光名勝記」「吾嬬路記」および「続諸州巡覧記」の一部が編集刊行される一方、『己巳（きし）紀行』（天理図書館、京都大学建築学研究室等に写本がある）から、『諸州巡覧記』『続諸州巡覧記』が編集刊行される。『木曾路記』は『諸州巡覧記』とともに、正徳三（一七一三）年に刊行された。

益軒の紀行は江戸時代の紀行ではよく引用されているが、特に木曾路紀行では多く、以下のように、多くの紀行作者が参照している。そのごく一部をあげておく。

これまで東海道名所図会にくはしく出しければ、漸貝原氏の木曾路之記にあるのみを補遺してこゝに拾ふ也。（『木曾路名所図会』　同書は他にも益軒の引用が多い）

岐蘇路を委く記せる書は貝原先生の『木曾路の記』と千鐘堂の『木曾懐宝鑑』の両書のみ也。今此二書によつて誤りを正し、もれ

たるを益し、猶また見安からんが為に宿より宿の間を一紙の一ト面に絵図に顕し、題して木曾路安見絵図と号するのみ。（棄楊『岐蘇路安見絵図』」序文）

貝原益軒翁の曰、「岐蘇路は洪水に越がたきの患すくなく、又海を渉の艱みなく、馬ごめよりうすい峠まで四拾七里は、やまのなかなれど箱根のごときの嶮岨なし」と。誠なるかな此言や。しかはあれど彼翁の記に洩れたる村里の名もまた少からず。はじめて道行人の憾みなきにしもあらず。故、某、見聞侍ることくさを書加へ一乃巻となし侍りぬ。老の寝覚のくりごとなれば、僻ごと多侍なん。塩筒老翁の補ひ糺されん事を仰希のみ。　丙寅春弥生福王信近述。（『岐蘇路寝覚草』冒頭）

貝原益軒『岐蘇路の記』云、「ねざめの茶屋を過て少ゆけば、なめ川の橋とて大なる橋あり。左に小野の滝あり。見事なる滝なり。細川玄旨の老の木曽越といふ紀行に、木曽小野の滝といふは、布引箕面などにもおさ〳〵おとりやはする、是程の物の此国の歌枕にはいかにもらしたるにや、とかけり」云々。予、享和改元辛酉浪花にありて、師走の廿八日の夜、順慶町の市にて『岐蘇路の記』を得て、細川玄旨の紀行ある事をしれり。そのゝち此書をもとむるに得ず。ことしはからずも中橋の市に此書を得たり。十五年の朦霧一時にはれし心地ぞする。時に文化十二年乙亥卯月廿一日なり。翌日つとめて記す　杏花園。（『老の木曽越』東北大学狩野文庫本末尾の杏花園の書き込み）

貝原篤信がかける紀行を見るに、（木曽のかけはしは）「其幅二間長さ十間ほど」と載たり。されば、ちかきころよりぞ、かくなれるにや。（竹田昌忠『木曾路記』）

（2）現存する板本

益軒の他の紀行類と同様に、『木曾路記』も実用的な案内記の体裁をとる(7)。各地に多くの板本が現存し、『国書総目録』は現存しないものも含めて約三〇点をあげる。引用の多さと合わせて、江戸時代を通じて広く読まれたことが推測できる。

以下、書誌カードの不備のため、不完全な部分もあるが、管見の一九点について、全体の特徴を要約し、簡単に書誌を記す。

① 東京芸術大学・慶応大学・宮内庁書陵部などが所蔵する一二点には益軒の紀行を多く板行した柳枝軒茨木屋太左衛門の刊記があり、新潟大学・東北大学・京都大学・無窮会図書館などが所蔵する、その中の八点が享保六年の広告を有する再版本である。また、京都の瑞錦堂丸屋善兵衛の刊記（都立中央図書館・国会図書館）が二点、正宝堂丁子屋源次郎の刊記（一橋大学・早稲田大学・岡山大学）が三点、無刊記の二点（東京大学）がある。

② 外題は後補のものもあるため決定的なものではないが、「木曾路之記」「岐蘇路記」「きそ路の記」の三種が混在する。

③ 冒頭、本文の前に「東山道西帰の序」五丁と「岐蘇路名勝図」六丁があり、内題はその前後に「木曾路之記」「木曾路記」と二度記され、すべての書で同一である。

④ 末尾の広告は、正徳三年の駄賃表でほぼ同じである。ただし、再

版時や他の書肆の広告が前後に加わるものもある。

⑤ 正徳三年の初版では序文の次に名勝図があるが、享保六年の再版では、順序が逆になる。したがって、慶応大学一二七－八五－一は再版本の可能性もある。丸屋善兵衛刊のものは初版、丁子屋源次郎刊のものは再版の順序になっており、無刊記の東京大学本二点は初版、再版の順序のものが各一点ずつである。

○柳枝軒刊記・正徳三年刊か

外題「木曾路之記」

（1）慶応大学一二七－八五－一　板本一冊

一八・〇×一二・一糎　薄青表紙

冒頭が名勝図、序文の順になっている。末尾の広告に「東海道の記」「同附録」の二本、「続諸州めぐり」、合計三本が増補されている。朱、書き入れ、貼り紙がある。

（2）東京芸術大学五七二－三九　板本一冊

一八・五×一二・五糎　濃紫に金の横縞表紙、左肩に黄色題箋　全一〇四丁（墨付も）

外題「岐蘇路記」

（3）慶応大学一二一－二九五－一　板本一冊

一八・〇×一二・三糎　海老茶色表紙か、傷みが強く左端題箋剥落痕

大正一五年和田竜一郎氏寄贈、近代に製本し直したもの、洋本のページで裏打ちされている。名勝図、序文はない。

外題「きそ路の記」

（4）国会図書館特別文庫一－二八〇五　板本一冊

一八・四×一二・四糎　薄青に濃紺の叢模様表紙、中央に白題箋

○柳枝軒刊記・享保六年の広告を末尾に有する再版

外題「木曾路之記」

（5）宮内庁書陵部一六四－八三六　板本一冊

一七・八×一一・九糎　藍色に草水模様表紙の名残、左上に白題箋

外題「木曾路之記」（傷みひどく、判読困難）

（6）東北大学狩野文庫三－七八二九　板本一冊

一七・九×一二・二糎　青色に横縞模様表紙

外題「□曽路之記」

（7）京都大学八三－キ－二　板本一冊

一八・〇×一二・〇糎　藍色に草水模様表紙、色は大半が剥落

外題なし

外題「岐蘇路記」

（8）無窮会図書館六九一九　板本一冊

一八・二×一二・二糎　薄墨に黒の草水模様表紙、左上白題箋

初丁に朱書入れ少々

外題「きそ路の記」

（9）新潟大学佐野文庫　板本一冊

一七・九×一一・九糎　青緑色に草水模様表紙、左肩貼題箋

（10）慶応大学一〇〇－九六－一　板本一冊

一八・二×一二・〇糎　藍色表紙　左端白題箋

外題なし

（11）早稲田大学ル三－三二七三　板本一冊
一八・四×一二・五糎　藍色表紙　左端に題箋剥落痕

（12）無窮会図書館オ三七五五　板本一冊
一八・二×一二・一糎　青色に草水模様表紙、左上に題箋剥落痕

○瑞錦堂丸屋善兵衛刊記

（13）国会図書館一八三－三一二　板本一冊
中表紙題「岐蘇路記　京師　瑞錦堂蔵版」　末尾に丸屋善兵衛広告

（14）都立中央図書館・東京史料〇六二－一　板本一冊
一八・〇×一二・一糎　灰色に黒の横縞表紙、左肩に白題箋　末尾に丸屋善兵衛広告

○正宝堂丁子屋源次郎刊記

（15）早稲田大学ル三－三二五七　板本一冊
一七・七×一一・五糎　薄青に亀甲模様表紙
中表紙題「平安書林　正宝蔵版」、刊記　京都六角堂前丁子屋源次郎

（16）岡山大学池田文庫Ｐ九一五－四　板本一冊
一七・九×一二・二糎　斜め卍格子に雲形散らし赤紫色表紙、左上白題箋
見開き題「平安書林　正宝蔵版」

（17）一橋大学一一一－五〇－七七　板本一冊
一七・六×一一・八糎
見開き題「平安書林　正宝蔵版」

○刊記を有しない

（18）東京大学Ｊ四〇－一九　板本一冊
小本　灰色題箋
序文、名勝図の順序

（19）東京大学Ｊ四〇－四〇一　板本一冊
小本　茶色格子表紙
名勝図、序文の順序

（3）益軒と木曾路

益軒には東海道を題材にした『吾妻路記』もあって、これも版を重ねている。しかし内容は書肆が谷秦山の紀行と合体させたほど、単調で不十分で名作とは言い難い。益軒自身の『木曾路記』序文を見ても、あるいは繁華を極める東海道には魅力を感じなかったのかもしれないが、『吾妻路記』での益軒は、その調査力や観察力を充分に発揮できていない。

『木曾路記』は刊行された益軒紀行の中では最も優れた作品で、豊富な情報と考察、清新な風景描写を多く有して完成度が高い。芭蕉にとっての『おくのほそ道』、小津久足にとっての『陸奥日記』と同様に、益軒にとっての『木曾路記』は彼の代表作であり、ひいては江戸時代紀行の基礎をかたちづくった作品である。木曾路は、益軒の博物学者としての知識や、地方生活者としての視点を存分に発揮して、紀行作家としての才能を活かせた街道であった。

5. 紀行から浮かび上がる木曾路の魅力

益軒の場合に典型的に示されている、紀行の題材としての木曾路という街道の特徴を、あらためてまとめておきたい。

（1）雄大な風景を有しながら、海に向かって開けた東海道と異なり、江戸時代の人々が好んだ、異境としての適度な閉塞感があった。

（2）観光地として常に旅人に顔を向けて一体化する東海道にはない、旅人と一線を画する地元独自の生活の場が存在し、その中を通り過ぎて行く快感を味わえた。

（3）そのように旅人に依存せず、江戸時代の人々が理想郷とする隠れ里のような異世界的要素を持つが、実際の辺境や僻地のように旅人を排斥・排除することはない。

（4）先が読めない冒険心を刺激される一方、治安が保たれている安心感がある。

（5）古典の舞台と現状が、東海道ほど乖離していない(8)。

すなわち、洗練された僻地であり、凍結保存された過去と生身の人間の日常生活が感じられる「安全に管理された、ほどよい辺境」であった。それが貝原益軒『木曾路記』をはじめとした、多くの紀行の良作を生み出した。

自然環境が生み出す（1）は人力ではどうしようもないが、（2）以降は、あるいは現代の観光地振興や地方の活性化においても参考となる要素かもしれない。

（この論考は、平成一九年三月三日、福岡教育大学人文社会講義室で、平成一八年度福岡教育大学国語教育専攻修士論文発表会を行った際の講演「木曾路紀行の特色」の発表資料を大幅に改訂補充したものである。）

（注）

（1）拙稿「近世紀行研究法」福岡教育大学紀要59号参照。

（2）東山道と中山道の関係については、今井金吾『今昔中山道独案内』（日本交通公社）冒頭の「中山道の歴史」に詳しい。

（3）拙稿「名所図会の風景描写」語文研究38号参照。

（4）平島順子「立場不角著『木曽の麻衣』の考察」（ぺりかん社「江戸文学」28）参照。

（5）「寝覚の床」の人気は益軒が『木曾路記』で長文を用いて絶賛した影響もあるかもしれない。たとえば清田儋叟は『孔雀楼筆記』の中で同所を期待外れと酷評している。

（6）『木曾路記』の魅力と紀行文学史上の意義については、拙著『江戸の紀行文』（中公新書）参照。またその稿本である『東路記』は『新日本古典文学大系　東路記　己巳紀行　西遊記』（岩波書店）に所収されている。

（7）本の体裁にもかかわらず竹田昌忠『木曾路記』が、明確に「紀行」と呼んでいるように、紀行作者たちはこれを紀行ととらえている。ただし、もともと木曾路紀行には、他の紀行類と比較して、横本の体裁をとるものが多く、東海道ほど情報がないことから、紀行類が旅人のための実用書としての機能を具える傾向がある。

（8）拙稿「近世東海道紀行の諸問題」福岡教育大学紀要36号参照。